

## 広島のゲタ作り

江戸時代、諸木・末光・岩上・玖などの高宮郡内（現在の安佐北区）の村々で盛んに行われていました。出来た製品は、広島城下へ売り出されました。原料は主に松・杉が使われましたが、江戸時代の中ごろから桐材などが普及し、ゲタの種類も多くなりました。明治時代になると、藩の統制から解放されて、中・四国方面などに販路を拡大し、落合村（諸木・末光・玖）は下駄の産地として発展して行きました。対岸の八木村（現在の安佐南区）や旧広島市内でも盛んにゲタが作られるようになりましたが、戦後は洋服の普及によってクツをはく人が増え、ゲタの生産は次第にへっていきました。しかし、現在、健康の面からゲタは見直されています。



ゲタの乾燥 昭和10年代の八木村（現安佐南区）にて 迫田正夫氏所蔵

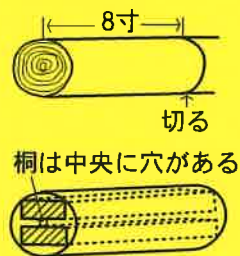
## 手作りの工程

一本の木から作られるゲタ（連歯下駄）の場合を紹介します。

### 原材料

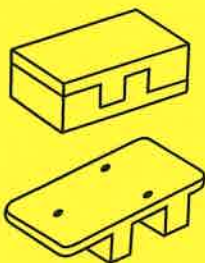
原材料は、明治時代に入ると松・杉に代わり軽くて水を含まない桐材が使われるようになりました。

### 荒木取り



原木を8寸（約24cm）に横切りします。この木からゲタの素材となる角材を取り、そして乾燥させます。

### 仕上げ



糸鋸を使いこの角材を歯が向き合った形で切り取り、一足分をとります。型を当て、台や歯の形を整えます。ハナオの孔をあけます。

### 鼻緒付け



ハナオは、問屋や小売店で取り付けます。

## 学習の手引

### 第29号

## はきもの



弥生時代後期の田下駄 静岡県・山木遺跡

人類の第一歩を月に印した宇宙靴（複製） アポロ11号（1969）

## 広島市郷土資料館

☎734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号

TEL (082) 253-6771

FAX (082) 253-6772

## はきものの歴史と種類

はきものは、ワラジ・ゾウリ・ゲタ・クツなどのように足にはくものをいいます。歩いたり仕事をしたりする時に足をまもり、またよそお装いをととのえる時にも用います。

はきものがいつごろから日本で使用されはじめたかは明らかではありませんが、3世紀に書かれた中国の本の中に「みんながはだし」という内容の記録があります。

しかし、弥生時代後期の静岡県とろ登呂遺跡や山木遺跡からは、水田耕作用のたげた田下駄が多く発見されています。

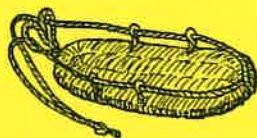
古墳時代には、はきものははにわ人物の埴輪などが出土しており、古い時代から人々は、はきものをはいていた

ことがわかります。奈良・平安時代に入ると、ワラジ・ゾウリ・ゲタなどのはな鼻緒の付いたはきものが発達します。鎌倉・室町時代には、

田下駄のはきかた  
(想像図)



ワラジ



あしなか足半ゾウリ・タビが盛んにはかれました。

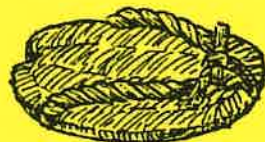
江戸時代になると、人や物の移動が盛んになり歩行などに用

いるワラジやゲタの使用が一般の人々に広まり、はきもの屋がのき軒を並べ、いろいろなゲタも作られました。

一方、西洋靴がはかれはじめたのは、江戸時代の終わりのころからです。明治時代には洋服の普及にともないクツの使用がふ増えて行きましたが、まだ多くの人々はゲタやゾウリをはいていました。ゲタの使用は、次の大正時代に最盛期をむかえます。今日のように、クツの時代の前は日本では、ゲタがはきものの主流でした。

材料も豊富で、湿気にも強く、はいたりぬいだりするのが簡単ですから、ゲタはわたくしたちの暮らしにあったはきものと言えましょう。

ゾウリ



ゲタ



下駄



高下駄

このように自然環境や使いみちなどにあわせ、いろいろな工夫がこらされてきました。はきもの種類が多いのはそのためです。

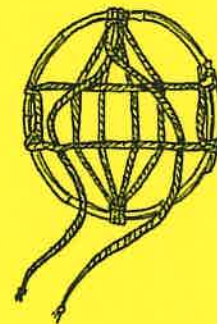
農村では、稲作がはじまったころから深い田の作業で足が土の中にしずむことを防ふせぐ大型のゲタが作られました。雪国ではゲタの歯を三角形にし、雪がくっつきにくいように工夫したゆき雪ゲタが作られ、また深い雪の中に足を踏み込まないよう木の枝などを使った円形のカンジキというはきものは、ずっと以前に考案されたものです。

わたくしたちは色々なはきものを通して先人たちの生きる知恵をみることが出来ます。

雪ゲタ



カンジキ



明治時代初期の靴  
(女性用)



図版・写真 『はきもの』 潮田鉄雄著 法政大学出版局  
(表紙も含む) 『日本はきもの史』 日本はきもの博物館  
『日本はきもの博物館 総合案内』 (同上)